

世界遺産 登録決定!

「縄文」から

考える女性の在り方



慎重に進められる発掘作業



膨大な発掘品の整理



縄文ポシット

(取材協力・青森県立郷土館
(写真提供・三内丸山遺跡センター)
(取材 石岡 沙野)

女性が支えた遺跡発掘

「日本女性会議2002青森」の報告書によると、考古学に携わる女性学者について「現在、考古学の学会に入っている人約3700人のなかで160何人くらい、4.数%」という記述があります。「しかし、それなら女性が考古学に携わっていないのか」というと、現場の近くで整理をし、それを報告書にするまでの丹念な最も下積みの大切な仕事は、どの現場へいってみても「全員女性」とも。

青森県内でももちろんその例に漏れず、青森市の三内丸山遺跡の発掘がたけなわだった1990年代、遺跡の発掘や整理作業に携わるスタッフはほとんどが女性でした。多くの地元女性たちが作業に従事しており、現在も見ることが出来る国宝や重要文化財の土器土偶を掘り出したのは、こうした女性たちです。

遺跡は、フルタイムで働いていない女性や農家の女性たちの昼間のパート先でした。しかし近年では男性作業員の割合が増え、現場によっては半数を占めることも少なくありません。働き方の多様化や就職難で、男性の応募が増えています。また、応募のほとんどはシルバー層で、いわゆる働き盛りの若者がこうした作業に従事することは少なくなっています。

ちなみに、2021年時点で、青森県教委の埋蔵文化財に係る行政職員は男性が8割を占めています。市町村別で見ても、女性の埋蔵文化財専門職員がいる自治体は少ないのが青森県の現状です。

「縄文時代、仕事の分担の根拠は性差ではなかった」と結んだ後、これは少し皮肉な数字でしょう。

県土が広い青森県では、遺跡の発掘調査が泊りがけになることも多々あり、性別や家庭状況を問わず働ける職場環境を整えるのは、なかなか簡単ではありません。地元の遺跡の価値が世界に認められたことを喜ぶだけではなく、世界遺産登録を契機に、それを守る人々についても考えていくことが望まれます。

こぼれ話ー南部の土器はきれい?

北海道・北東北地域では、いわゆる弥生時代というものがなく、「縄文時代」が中心で、採集狩猟を中心とした生活が続きました。さらにもっと北、冬、雪に閉ざされた地域とそうでない地域とで、生活に違いがありました。土器作り一つとっても、土を乾かしたり野焼きしたりといった作業は、雪がある地域ではできません。県内では、雪の少ない県南地方の土器の方が、時間がかかる緻密な設計に基づいて作り付けられているという説があります。また、雪深い津軽地方の土器には、仕上げを焦ったような印象のものも。今季の青森市や弘前市のような大雪を考えると、津軽の土器にはタイムリミット、「納期」があったのかもかもしれません。

青森市の三内丸山遺跡からは、土器土偶など土製の遺物の他に編籠ー縄文ポシットに代表されるような、植物の皮や草で作られた品々も出土しています。雪国の縄文人たちは、野外の作業ができない間、屋内でじっくりとできる手仕事をしながら、春を待ったのでした。

青森市の三内丸山遺跡をはじめ、17の遺跡で構成される「北海道・北東北の縄文遺跡群」が、2021年7月、ユネスコの世界文化遺産に登録されました。1万年以上にわたる縄文時代の人々の生活と精神文化を伝える貴重な遺産として、世界に認められたのです。自然と共に生きた縄文の世で、男性と女性それぞれの在り方はどのようなものだったのでしょうか。



三内丸山遺跡 大型掘立柱建物と大型竪穴式住居

2002年、青森県で開かれた「日本女性会議」に伴い、青森市の三内丸山遺跡で「大昔の女性と見つけよう未来」と題したワークショップが開かれました。大型竪穴式住居の中に集まった女性たちが、縄文人になり切って自己紹介したり、考古学者や文化人類学者とさくばらんに話したり、太古の女性の暮らしを通じて、現代のわたしたちの生き方について考えました。

「近代社会は科学技術が発達しているけれど、古い知恵が見直されている」「男女が同じように暮らさなければ、共同参画社会は作れない」「女性を尊敬を持って見る」「世帯ではなく自立した個人として考えなければ」。「日本女性会議2002青森」報告書を抜粋してみると、20年経った現在にも通じる議論が行われたことがわかります。

20年前のワークショップ

同報告書の中で、文化人類学の観点から「狩猟採集社会」について触れた部分があり、それが徐々にならわかってきました。現在では「狩猟採集」ではなく、「採集狩猟」社会なのだということが通説になっています。

報告書では、こう続いています。「女性の仕事は自立しないけれども、長い目で見れば、多く仕事をしているし、男性の仕事は自立しなくても、じつはそれほどではないのだと思います」

報告書の中で、考古学者の「土器は女性で作る」という発言があります。歴史の資料集や博物館には、縄文時代の人々を想像して描いた絵があります。男性は槍や弓を持ち、女性は土器を作ったり土器で煮炊きをする、そんな絵を、一度は見たとがあるでしょう。

実際には、土器を女性が作っていたことを証明する資料はありません。男性が狩りに出る以上、集落の中でできる手仕事は女性が行ったと考えられますが、炊事や女性のイメージから、そう描かれることが多いといった意見もあります。

20年間で変わった認識

土器を作ったのは誰?

「狩猟採集社会」について触れた部分があり、それが徐々にならわかってきました。現在では「狩猟採集」ではなく、「採集狩猟」社会なのだということが通説になっています。

報告書では、こう続いています。「女性の仕事は自立しないけれども、長い目で見れば、多く仕事をしているし、男性の仕事は自立しなくても、じつはそれほどではないのだと思います」

報告書の中で、考古学者の「土器は女性で作る」という発言があります。歴史の資料集や博物館には、縄文時代の人々を想像して描いた絵があります。男性は槍や弓を持ち、女性は土器を作ったり土器で煮炊きをする、そんな絵を、一度は見たとがあるでしょう。

実際には、土器を女性が作っていたことを証明する資料はありません。男性が狩りに出る以上、集落の中でできる手仕事は女性が行ったと考えられますが、炊事や女性のイメージから、そう描かれることが多いといった意見もあります。

地域によっては、大型で女性が持ち上げるのは困難な土器も存在します。また、時代とともに分業化が進み、技能集団によって土器が生産されるようになり、いよいよ土器作りには性別は関係なくなってきたとされます。

採集狩猟文化が中心の縄文時代には、農耕文化の弥生時代と違い、「個人の所有」という概念がありませんでした。食料の確保や土器作りなど多くの作業は家庭単位ではなく集落単位で考えられていました。

狩猟は男性の役目で、それ以外の採集や手仕事などは女性の仕事であったとされています。

しかしその分担は、男女の性差で決まっていたわけではなく、集団の中で「できる人ができることを」やっていたに過ぎません。力が強い男性は力が必要な作業を行い、女性は子供を産む能力があったので、それと並行して可能な仕事をしていた。

も力が強く狩りが上手な女性が狩りに出たと言えは、それを禁止することもなかったでしょう。怪我や病気などで動けない男性は、狩猟に行かず、自分で動ける範囲でできることをしたで集団の中で人々が、「性別」ではなく「適性」に合わせて臨機応変に役割分担し、自然のものを所有せずに分け合って暮らす。その生き方が、縄文時代が1万年もの間続いた大きな要因でした。

できる人ができることを 性差で決まるのではない

